都留文科大学研究紀要　第69集（2009年３月）
The Tsuru University Review, No.69 (March, 2009)

反骨の教育家　評伝　長崎太郎 Ⅶ

A Critical Biography of NAGASAKI Taro (PartⅦ)

関口安義
SEKIGUCHI Yasuyoshi

京都美術大学学長に

一九四九（昭和二四）年春、長崎太郎は国立山口大学の創設に奔走していた。旧制山口高等学校を中心に山口経済専門学校・山口師範学校・山口青年師範学校・宇部高等工業専門学校・山口獣医畜産専門学校などを合わせ、大学に昇格させるというのは、当時の山口高校校長長崎太郎の使命であった。大規模のストに見舞われ、その対策に苦悩しながら、彼は山口高校の大学昇格のために力を尽くした。幸い国の方針は、一県一大学の方向に向かっており、新制大学としての山口大学実現の道は、着々と進んだ。学長には松山基範元京大理学部長の内諾も得、長崎自身は文理学部長に収まる予定もたった。すでに述べたように、松山基範とは京大時代に知り合った旧知の仲であった。一方、太郎は京都市立美術専門学校校長の招聘も受けていた。

長崎太郎の『佐々木惣一先生と私』によると、当時大学昇格その他の所用で文部省に出頭すると、大学課長から山口を去ってはどうかと言われ、佐々木からは「京へ帰り、市立美専をやってみないか。歴史のある、京都市には大切な学校で、君がやってみる価値は十分ある」と勧められたのであった。佐々木は山口での長崎の孤軍奮闘ぶりを知り、京都美専の校長職を斡旋したのである。タイミングは実によかった。大ストを収拾したとはいえ、その余燼はくすぶり、校長がそのまま新設山口大学の学部長として居座ることはできない状況も生じていたからである。

京都美専の学校設置者は京都市で、当時の市長は神戸（かんべ）正雄であった。神戸正雄は京都大学経済学部創立メンバーの一人で、専門は財政学である。京大教授を経て一九三七（昭和一二）年関西大学学長

となり、第二次世界大戦後京都市長になった。長崎太郎は京大学生主事時代に彼の世話になっていた。また、京都市役所には、京大粛学事件の際に朝日新聞記者として、側面から応援してくれた田畑磐門が助役として、さらに事件を調査起訴した検事の永田圭一が警察部長をしていた。こうしたいくつもの縁もあり、長崎太郎は京都行きを決意する。

一九四九（昭和二四）年六月十八日の『防長新聞』は、次のような「社説」を掲げ、長崎太郎の京都行きを祝している。

長崎校長を送る

山口大学文理学部長に擬せられていた官立山高の長崎校長は、こんど京都美術専門学校長に転任することに決つて、両三日中に山口を去ることになつた。長崎校長は先頃の学生スト騒ぎでは、四面楚歌のうちに敢然と学府の権威を護り続けて、今日の安泰を見たのであるが、その間の心労は並大抵のものでなかつたことは想像に余りある。

校長はさきには高岡工専の創立に尽し、近くは山口大学の発足に献身的な努力を傾注したのであるが、それ等の手腕が買われてか、こんどは京都美校の大学昇格に乗出すことゝなつたわけである。校長自らも三度目の試練と云つているが、そうした難局に配せられて切り抜け得る人材は、広い学界にもそう沢山はいない。

山口を去るに臨んで長崎校長の心境は明鏡止水そのものであろうと信ずるけれど、われら郷土人は、学都山口の名において校長の残した功績を称え、壮行の辞を送ることにしたい。

新聞社説としては規格はずれともいってよい、見事なまでの「壮行の辞」である。長崎太郎はこの記事を非常に喜び『佐々木惣一先生と私』に載せて、「社説をもって送られた校長はいまだかつてなかったと聞いた」と書いている。確かにそうだろう。太郎の得意の念や、ここに極まれりといった感がある。

ところで、京都市立美術専門学校（現、京都市立芸術大学）は、歴史のある学校だ。浩瀚な『百年史 京都市立芸術大学』（京都市立芸術大学百年史編纂委員会、一九八一・三）によると、美術学部の歴史は、「明治13年7月1日に京都府画学校として開校した時より、約2年前にさかのぼった明治11年8月15日に始まる」（原文は横書き）とあるから、東京美術学校（現、東京芸術大学）の一八八七（明治二〇）年の設立より古いことになる。長崎太郎は一九四九（昭和二四）年六月十日、京都市立美術専門学校長となり、翌年四月、美大昇格後は教授兼学長代理を勤め、六月三十日には学長に就任している。

長崎太郎が京都市立美術大学学長となったのは、これまでの経歴に照らして、きわめて自然であったと思う。若き日、大学は法学部に籍を置き、政治経済を学んだが、中学校の頃から彼は絵筆を握り、かなりうまい絵を描いていた。京大時代には友人井川（のち恒藤）恭と二人して奈良の西の京あたりを歩いて古寺巡礼に励んだことは、彼の日本美術に対する関心を深める基となった。また、彼は学生時代から京都博物館にしばしば通った。そして東洋画の数々に親しむこととなる。先に言及したように、京都博物館には大徳寺の観音猿鶴図など、彼を捕らえて放さないものがあった。休日には古い寺々の襖絵や神社の奉納絵馬を丹念に見てまわっている。

大学卒業後日本郵船に入社した彼は、まもなく同社ニューヨーク支店に勤務し、暇を見つけてはせっせと美術館通いをした。これもすでに述べた通りであり、在米中シカゴやボストンの美術館、それにニューヨークのメトロポリタン美術館などでフランス印象派の作品にふれたことは、彼の美術鑑賞力を磨くものがあった。特に在住していたニューヨークでは、何かというとメトロポリタン美術館に通いつめた。彼のヨーロッパ美術の的確な知識と鑑賞眼は、ニューヨーク時代に養われたといってよい。

一九二四（大正一三）年六月には、パリ在住の恒藤恭を訪ね、共にフランスからイタリア各地をめぐり、ルネッサンス以前のヨーロッパ古美術にも接している。恒藤とはいったん戻ったパリで別れ、その後はエリ・フォールの美術史を携えて、ひとりでヨーロッパ各地をめぐり、新旧の美術を研究している。帰国後、武蔵高等学校教授時代には日本史や西洋史の講義の中で美術史を扱い、東西両洋の文化の比較に興味をもった。京大学生主事時代には、学生課の仕事の一つとして美術講演会や美術展覧会を主催するなど、長崎太郎と美術とのかかわりは深かった。

長崎太郎の美術への視点は、西洋と東洋の美術の比較という点に特色をもつ。高岡高商（高岡工専）校長時代には、高岡の瑞龍寺で守景の襖絵を見出し、山口高校校長時代には常栄寺で雪舟の庭の荒れたのを嘆きながら、非常時の中にあっても美術の鑑賞を怠っていない。古本屋の店先で桃山時代の画家海北友松（かいほうゆうしょう）の尾長鶏が枯れ枝にとまって鳴いているのにめぐりあったのも、山口時代のことである。そうした彼が山口高校の大学昇格という難事を成し遂げた後に、関西唯一の美術学校を大学に昇格させる仕事が舞い込んだのである。彼が生涯最後の勤めとして受け止めたのも当然であった。まさに趣味が本業になったと言うべきか。彼はいさんで京都に赴いた。

当時京都美専は、大学昇格運動をめぐって半年前から学校騒動がもちあがり、昇格は一度見送りになっていた。『百年史 京都市立芸術大学』は、その辺の事情を次のように記している。

美術専門学校においても変身の胎動が始まり、昭和23年7月、京都市会の決議によって、新制大学への昇格準備が進められ、昇格申請書が文部省へ提出された。（略）

美術大学への昇格運動は、物資の乏しいなかで早期実現をもとめるあまり、その準備に誤解を生じ問題化するところとなった。米軍政部C・I・Eもその動向に強い関心を示し介入するところとなり、学校は12月末にいたり急遽申請書を取り下げた。美専教授会は翌24年1月に再建委員を選出し、教養学科重視の再建構想を提出したが、学生も申請書を取り下げたことなどを問題とし、事情説明を求める集会を開き学校再建決議書を市当局・市会へ提出するなど、紛糾した。

市会は美術専門学校調査に関する委員会を設け、真相の調査糾明にのりだし、3月には美専改革案を議決した。それを受けた市当局は美専整備委員会を発足させ、学校の改革と正常化をはかり整備に着手した。美専校長・中井宗太郎が辞任し、それにともない美専教員も総退任した。市総務局長。佐川一雄が美専校長事務取扱いとなり、6月には長崎太郎が美専校長に就任し、改革方針にもとづいた再建が進められた。新たな教員組織が構成され、9月に再び大学昇格の申請書を文部省へ提出する

こととなった。（原文は横書き）

美術に関心があり、その鑑賞力も抜群だとはいえ、美術の専門家とは見なされていなかった長崎太郎が校長、しかも大学昇格の暁には学長になるという前提で、この学校に招かれたのは、その政治力が買われた面もあったようだ。事実、当時の京都の新聞の中にはそう報じたものもあった。もっともその実現には、佐々木惣一の推薦や時の市長神戸正雄、そして助役田畑磐門の力によるところが大きかった。

長崎太郎は勇躍第二の故郷京都にもどる。彼には日本をリードする美術教育者の養成という大きな抱負があった。一九四九（昭和二四）年九月四日の『京都新聞』は、「あの人この人」欄に「美専校長長崎太郎氏」を登場させて、次のようにそのプロフィールを紹介している。以下に引用しよう。

長崎というのでバッテンの生まれかと思ったら、土佐のヨサコイの産。太平洋の荒波を見て育っただけに土性骨はチト手ゴワいところがある。一高、京大を卒えて、海国土佐人らしく海の仕事をしようと日本郵船へ入ってニューヨーク支店詰めを丸五年間やって帰って来たら、何を思ったかトタンに海と縁を切って、畑違いの武蔵高校の先生になって七年、それから母校の京大で学生主事を十五年も勤め上げたから京都にはなじみが深いわけ。昨秋以来内紛を続けていた美専校長に引っ張って来られたのは、高岡高工のゴタゴタや、山口高校のスト騒ぎをうまく納めた手腕を買われたからだが、何せ相手が美術家だから普通人ようには扱いにくゝ、まるく納めてゆけるかどうか。「わしは美術のことはチクともわからん」というが、工芸家の富本憲吉、楠部彌弌、近藤悠三氏らとは久しいつきあいで、陶器を語らせれば素人ばなれがしているから、満更の門外漢でもない。封建的な塾制度の空気の強い美専をいかに改革してゆくか、土佐ッポの太ッ腹だけではチクと難しい仕事だが、太郎冠者多分に成算があるのか、案外平気で「万事ヨサコイの調子でやっつろう」

長崎太郎の経歴と人となりを実に巧みに捉え、ユーモアもにじませた読ませる記事である。本人にしっかり取材して書いた記事なのであろう。背後に長崎太郎のいとも満足げな顔が見える。

京都市立美術専門学校校長としての長崎太郎の仕事は、多忙を極めた。着任して驚いたのは、京都美専の校舎の大部分は、新制日吉ケ丘高校に占拠されており、教員は紛争解決のため、全員罷免されていて、教室には机・椅子さえもない。まさに廃墟そのものであったという。長崎太郎は校舎も教員も学生もいないに等しい京都美専に校長として赴任したのである。彼は日本画の教員集めからはじめた。『佐々木惣一先生と私』にそのいきさつが記されているので、かいつまんで述べよう。

日本画科の教員には、上村松篁・小野竹喬・榊原紫峰・徳岡神泉らが決まった。次いで洋画科には、須田国太郎・黒田重太郎を招き、小磯良平の講師就任も承諾してもらう。当時京都には彫刻は育たないと言われてきたが、長崎太郎は育ててみせると豪語し、東京芸術大学の菊池一雄を兼任教授に、そしてユニークな作家辻晋堂を迎え

た。工芸部門には、まず上野伊三郎と富本憲吉を教授に、後には近藤悠三を講師として迎えることになる。近藤は陶芸家として一家を成し、一九六九（昭和四四）年四月には、学長となっている。

京都市立美術大学を大学に昇格させたのは、ひとえに長崎太郎の昼夜を通しての奮闘にあった。『百年史 京都市立芸術大学』は、この辺の事情を素通りしているが、一時は廃校かと思われた京都美専が四年制大学となり得たのは、長崎太郎の教育に対する情熱と抜群の政治力にあった。大学昇格を実現させるために、アメリカ軍政部と直接渡り合うことのできた語学力は、この場合大いに役立った。占領下の日本では、アメリカ軍政部ＣＩＥの意向を無視できなかったからである。長崎太郎着任以前の大学昇格申請の取り下げも、ＣＩＥの「介入するところ」とは、『百年史』の記すところでもある。

長崎太郎は高知県立第三中学校（現、高知県立安芸高等学校）時代から英語を好み、一高時代は英文科である。しかも、若き日、四年半ものアメリカ生活を送っている。敗戦当時の普通の日本人学者よりも、英語力、特に会話でははるかに秀でていた。それが生きることになる。彼はまず日吉ケ丘高校に占拠されている校舎の返還を求めることからはじめた。美専整備委員や市当局に教室配分のことを訴えても、らちがあかない。彼は、アメリカ軍政部教育係に足を運ぶ。『佐々木惣一先生と私』から関連記事を引こう。

私は軍政部教育係に面会を求め、通訳者をぬきにして英語で美専の歴史を説き、美専存続の理由を縷述（るじゅつ）して、校舎の返還を求めた。教育係官はこれに対して、美専は教師・生徒ともにろくに出席もしない学校であることを厳しく指摘批難したが、強談（こわ）判の末やっと全校舎の半分を美専に返してもらう了解を得た。八月末になって、教育委員会と市総務局との間に、校舎の約二分の一を美専が使用するという協定が成立した。

これで美専の足場が出来た。この勢いに乗じて次の段階に進まねばならぬ。市の意向に従って専門学校のままで置けば、生徒を卒業させてしまえば制度上廃止の運命に陥る。輝かしい歴史のある学校を消滅させるのは、市のためにもとらぬところであると力説して、私は市当局に対し、学校を如何にして存置するかと迫った。それでは、短期大学にしてはとの議が出たが前年大学昇格を市会で議決している次第もあるので、私は、かねてから美専に深い関心を寄せている美専整備委員長（市会議員）竹内忠治氏にはかり、この際四年制大学とすることに同意を求め、その快諾と協力を得ることができた。

長崎太郎の真価が発揮される時が来たのである。その一つは、事に賭ける情熱と気骨である。信念を曲げない父親譲りのいごっそうぶりは、時に激しく人と対立するものの、総じて囲りの信頼を得た。次には、これまで再三述べたように抜群の語学力である。「通訳者をぬきにして」占領国の軍政部と交渉できる人など、未だ珍しかった時代である。下手な通訳者は無用とばかり、長崎太郎は若き日に習得した英語を用いて交渉にあたった。理は美専側にあるのだから、校舎の返還はたやすかった。二つめの大学昇格認可申請などは、以前山口大学設置責任者として苦労した経験が大いに生かされた。長崎太郎の水を得た魚のような活躍がはじまる。

一九五〇（昭和二五）年四月一日付をもって京都市立美術専門学

校は大学に昇格し、京都市立美術大学（のち京都市立芸術大学と改称）となった。他の国立大学に一年遅れての新制大学としての出発で、長崎は学長代行、やがて正式に学長となった。歌集『山青集』の「昭和二十五年」の箇所に「京都美術専門学校大学昇格」と題し、彼は以下の二つの歌を書き留めている。

元旦も夜のふくるまで絵羽子板を売り歩くなりあはれ校長
この校の過去と将来を思はぬにあらねどもうつつのいまは
昇格に努めむ

こうして京都美専は大学に昇格した。けれども、長崎太郎を積極的に支持した京都市助役の田畑磐門は、神戸正雄の後を継ごうと、この年二月に行われた京都市長選挙に立候補するも、革新系で出た高山義三（のち保守派に鞍替えする）に敗れてしまう。高山は田畑の連れて来た長崎とはいえ、大学昇格に功績もあるので、長崎の初代学長就任を認めたのである。

学校紛争もからんで廃校寸前、校舎には新制日吉ケ丘高校が同居し、教授も生徒もいないに等しかった京都美専が、京都市立美術大学に昇格できたのは、確かに長崎太郎あってのことだった。繰り返すが、彼の過去の経験がこの時ほど生きたことはない。特に占領下のアメリカ軍政部教育係とのやりとりによる校舎返還交渉には、その語学力が役立ち、大学昇格認可申請には、山口で大学設立責任者として奔走した経験が生きたのである。

さて、長崎太郎は京都美専を再建し、大学に昇格させる第一歩は、教授陣の充実にあると考えた。建物はどうにでもなる、まず人であるというのが彼の学校経営方針であった。きわめて真っ当な考えで、説得力を伴っていた。それは武蔵高校、京大、高岡高商、山口高校と学校を渡り歩いてきた教育家長崎太郎の信念であった。彼は在野の実力ある前述の芸術家たちに白羽の矢を立て、彼らの自宅を訪ね、熱心に就任を乞うたのである。

長崎はまた、大学は民衆に門戸を広く開放しなくてはならないと考えていた。彼はアメリカ滞在中、いくつもの大学を訪れ、大学がいかに市民に開放されていたかを知っていた。当時にあっては画期的とも思われる、教授や学生の街頭作品展なども、アメリカの芸術大学の催しに学んだものだった。さらに大学運営の資金集めに、団扇絵の展観を計画したり、夏休には学生を小学校や中学校の林間学校に行かせ、写生画や自由画の指導をやらせるなど、ユニークな教育を打ち出している。

美術教育家としての長崎太郎は、徒弟的方法での人材育成には疑問を抱いていた。彼は技術だけの美術家を育てるのでなく、人間としても十分評価される人材を育てたいと願った。そのために一般教養にも重きを置き、あらゆる角度からものを考えさせようとした。それは当時の教養重視の大学教育に合致していた。京都大学その他から多くのすぐれた教授を非常勤講師に依頼したのも、一般教養重視のゆえであった。

彼は学生に東西両洋の精神を究めさせるため、貧しい予算の中から、大学図書館に多くの書物を集める努力を惜しまなかった。学長でありながら彼は自ら古本屋の店頭に立ち、本を選んだ。かつてニューヨークで、毎日昼休みにダウンタウンの古書店を漁った熱気が甦る。多くの書物が長崎太郎自らの眼で確かめられ、選ばれ、図書館に収

まった。ホブソンの東洋陶磁器に関する写真入りの貴重な図書を安価で求めた時のうれしさは、限りないものだったという。

しかし、敗戦後の日本の一市立大学の予算は高が知れていた。彼は市長に懇願して、図書充実のための特別の経費を支出してもらった。が、教授会にはかって各科に配分すると、わずかな額となり、備えておく価値のないものが、購入されてしまう始末であった。そこで当時の金額で二十五万円は本部の分として残し、学長にその支出がまかせられると、彼は藤田玄路の翻刻禅書のコレクションを藤田家と交渉の末、購入している。

後年のことになるが、長崎太郎は自身の貴重な図書を京都市立芸術大学図書館に寄贈する。大学予算における図書費の少なさと、蔵書充実を慮（おもんぱか）ってのことであった。中にエマソン、ホーソン、ソロー、ワーズワース、アーヴィング、ポーなどの初版本があったことは、すでにふれた。今日現物を確認するのは、目録もあることからして容易である。

長崎太郎は若き日の海外生活の体験もあって、インターナショナルな感覚をもっていた。大学運営が軌道に乗ると、アメリカの女子学生を受け入れたり、陶芸科の実技を外国人に見せたり、京都美大生の作品、合計六十点を米国国際学生協会の手を通じて、アメリカ各地での巡回展覧会を行ったりしている。巡回展覧会は一九五二（昭和二七）年六月、神戸出帆の赤城丸で発送され、カリフォルニアの各地の大学で展覧されたのを手始めに、オハイオ、コーネル、ミネソタ、それにシアトルのワシントン大学などを経て日本に送り返された。京都市立美術大学生のこの巡回展覧会は、アメリカの青年たちに好感をもって受け入れられ、反響も大きかったという。

長崎太郎が京都市立美術大学創設のため心血を注いでいた頃、旧友恒藤恭もまた大阪市立大学の創設のために苦労を重ねていた。芥川龍之介の親友としても知られる恒藤恭は、第二次世界大戦直後、経済学者本庄栄治郎の学長辞任の後を引継ぎ、大阪商科大学の学長職に就いていた。彼は学長就任翌月の一九四六（昭和二一）年二月、教授会で教授全員の辞表提出決議を求め、教授の半数を入れ替えるという画期的人事刷新を行った。時代の要請があったとはいえ、よくぞそこまでやったと誰にも思われるような改革である。ＧＨＱの強力な支援があったとはいえ、そこには京大事件を闘い、戦中の大学の思想的堕落を見つめてきた冷静なリアリストの眼が光っていたといえよう。

一九四九（昭和二四）年四月、恒藤恭は大阪商科大学を母体とした大阪市立大学の創設とともに、総長（のち、教育公務員特例法によって「学長」と改称）に就任した。郷里松江にある島根大学からの学長要請を断っての就任であった。大阪市立大学は戦災は免れたものの、大阪商大時代に海軍に一部占拠され、戦後はアメリカ軍によって学舎全部が接収された。

大阪市立大学は、占領の被害をもっとも大きく被った大学である。それゆえ恒藤恭の学長としての仕事には、校舎返還、接収解除という難題が第一に存在した。新制大学がスタートしても、核となる杉本町校舎は依然米軍に接収され、焼け跡の小学校での授業が続いていたのである。恒藤恭は学長として市当局・市会・大学三者一体となった返還運動に、ねばり強くかかわり、朝鮮戦争後の一九五二（昭和二七）年八月に、杉本町校舎の一部（約三分の一）の接収解除を獲得し、三年後全面返還に漕ぎつける。

創設期の大阪市立大学に尽くした恒藤恭の功績は、長崎太郎が京都市立美術大学創設期に果たしたものと同様のものがあった。若き日、二人は第一高等学校の北寮で日々を共にし、一時は寮を出て、本郷弥生町の下宿で暮らす。また、一高最後の学期は、小石川上富坂の日独学館でも生活を共にしている。さらに京都大学の学生時代も、吉田近衛町の新築成った学生寮で過ごすなど、二人はどこへ行っても一緒であった。一九二四（大正一三）年のイタリアへの旅も、一九三三（昭和八）年の京大事件でも苦楽を共にしている。戦後二人が同時期に関西の公立大学の学長として敏腕を揮ったのも何かの巡り合わせなのかも知れない。

長崎太郎が京都美大の基礎固めのため奔走していた一九五三（昭和二八）年十一月二十六日、最愛の妻美和が突然死亡した。その日、太郎は奈良にいた。日本美術史担当教授に谷田閲次（大和文華館勤務）を招くため、大和文華館理事の金森乾次に了解を得ようと、奈良県富雄町の金森の家を訪問中であった。金森の家に着いたと同時に、太郎は京都からの電話で妻の異常を知ったのである。

家に帰った時には、妻の顔には白布が被されていた。安らかな死に顔であった。その日妻の美和は、夫を送り出した後、黒谷の燃えるような紅葉を二階座敷から眺めて、娘の文子にあとで一緒に見に行こうと声をかけて、洗濯のため風呂場に入ったとたんに倒れた。文子が異常な物音に気づいて駆けつけた時には、すでに息は絶えていた。心臓痲痺による死であった。太郎は妻の死を次のように詠んだ。

湧き起る感謝の心とどまらず亡き妻思ひ下る坂道

白妙の布とり見れば静かにも妻は眠れりとはのねむりを
黒天鵞絨の半襟に化粧せぬ妻の顔とこしへに残れ吾がまなかひに
今年こそは毛布買はむと今朝語りあひし妻のなきがら静かに横たはる
美しき心に集ふ美しき葬りなりけり紅葉照る山に

歌集『山青集』の「妻美和逝く」からの抜粋である。『山青集』（比叡書房、一九五五・一二）は、六十一歳で逝った亡き妻美和に捧げる意味で編まれたものである。「後記」に「私の作つたものの中から先生のとられたものがおよそ千数百首、その中からさらに先生を煩はして選んで頂いたものが三百二十六首、それに前後の続き具合の上からや、あるいはまた他の理由から是非のこしておきたいと思ふものを後から附加へて、それらを年代順にこの集に収めた」とある。「先生」とは一高時代の同窓であり、彼の歌の師、土屋文明をさす。すでに述べたように、長崎太郎は太平洋戦争前夜の「日々の仕事が愈々困難の度を加へて来た」一九四〇（昭和一五）年の秋から土屋に折々の歌稿を見てもらっており、短歌の上では土屋を師と仰いでいたのである。

妻の死に続いて一九五四（昭和二九）年十月二日、長崎太郎はただ一人の兄弟である弟次郎を癌で失う。戦争末期、出版企業整備令によって、プロテスタント系出版社十社（長崎書店、日本聖書協会、愛之事業者、新生堂、教文館出版部、警醒社、日曜世界社、基督教思想双書刊行会、一粒社、基督教出版社）が統合してできた新教出版社の社長に推された次郎は、以後死に至るまでキリスト教出版に全身を捧げた。

彼は私財を抛(なげう)ってまで努力した。そして戦後の困難をくぐり抜け、新教出版社をキリスト教出版の代表的存在と見なされるまでに育てたのである。また、信濃町教会の会員としてカルヴァン主義に立つ信仰を生涯貫いた。十月四日夜、霊前祈祷会が新教出版社で、翌五日信濃町教会で告別式が行われた。

長崎太郎は急遽京都から駆けつけ、霊前祈祷会で弟次郎を回想した話をする。それは「幼き頃の次郎」のタイトルで、雑誌『福音と世界』一九五四年十一月号に掲載された。中に「次郎は最初基督教を津久井牧師に聞き、やがて百嶋(ママ)牧師より教えられた。そのよき種は、五十九歳にして次郎の生涯を横須賀衣笠病院にとじる時まで育ちつづけた。次郎は信ずるところを大胆に述べ、大胆に行い、苦難に堪え、犠牲に甘んじて、基督教書籍の出版事業に全身全霊を投じた」とある。太郎は晩年の次郎に、新約聖書の注釈を書くことを勧め、次郎は死に至るまでその仕事に没頭した。次郎には子はなく、残された財産は、新宿区小川町の新教出版社の新ビル建設費用などに使われた。

こうした中でも長崎太郎が学長を勤める京都市立美術大学は、その充実した教授陣容と施設確保の努力、それに時代の波にも乗って、次第に東の東京芸術大学と並び称されるほどの大学に育っていった。創立当初は教授も校舎や施設も十分でなく、学生の確保すら心配されていた。当時の大学入試は一期と二期の二回に分けて行われ、一期には、どちらかというと全国規模の大学が集まっていた。教授会では、はじめ志願者数を心配して入学試験日程を第二期にしようかとの意見も出ていたが、学長長崎太郎の意向もあって、思い切って第一期にすると、志願者数は年々増加し、洋画と工芸科は、たちまち激しい競争率となった。優秀な学生が集まり、大学は目に見えて活況を呈するようになる。

その頃、工芸科陶磁器専攻に入学した学生に加守田章二がいた。加守田は後年すぐれた陶芸家として一家を成す。彼は大阪府の岸和田高等学校を経て、一九五二（昭和二七）年の入学であった。京都美大が順調に伸び始めた時代である。長崎太郎は加守田の油絵にまず好感を持ち、その陶芸作品にも終生理解を示した。「古清水」（宮崎小次郎編『京に田舎あり』晃文社、一九四三・六収録）というエッセイに見られるように、長崎太郎は古清水のような陶器を再評価できる眼を持っていた。彼はいち早く加守田章二に次代を担う陶芸家の才能を見出していたのである。加守田は自己の才能を評価してくれる長崎学長を尊敬し、慕った。

松原劉一の「20世紀陶芸界の鬼才　加守田章二の軌跡」（図録・京都国立近代美術館編『加守田章二』朝日新聞社、二〇〇五・五）には、「加守田が、京都市立美術大学へ入った時には、教授に富本憲吉、助教授に近藤悠三、助手に岩淵重哉がおり、学長は長崎太郎であった。この富本と長崎との出会いは、加守田にとって生涯を通じて大きな財産となり、またその尊敬は永遠に変わることがなかった」とある。長崎太郎は名伯楽であり、在学時代の加守田章二に、すぐれたものを認め、積極的に支援したのである。それゆえ加守田は、長男に「太郎」という名をつけるほど、長崎太郎を徳とした。長崎太郎の強い影響を受けた京都美大関係者には、他に近藤悠三・辻晋堂らがいる。

京都市立美術大学は、世間から注目されるほど発展し出すと、いくつかの問題が吹き出す。まず、市が設置者であることを笠に着て、市議や市関係者の中には大学を動かして子弟を入学させようとする

動きが出て来たのである。いつの時代にもある入学試験をめぐる問題である。特に市民の子弟を優先しろとは、市立大学にまつわりつく悪しき風習であり、それが顕在化しはじめたのである。学長の長崎太郎は教授会と図り、情実を排して合否を決定し、政治的考慮はまったくしなかった。市の建てた大学だから市民に有利にとの説に対して長崎は、「優れた学生を収容して優秀な大学を作ることが結局京都市のためである」という真っ当な論理で押し通した。けれども、こうした論理が通らないのが、市立大学の宿命と言えようか。合否への圧力は、長崎太郎学長在任中、常につきまとった。

次に大学昇格に当たって長崎太郎自身が中心になって進めた教員人事は、どちらかというと在野の優秀な芸術家が多かったため、日展系の作家たちの不満が生じてきたのである。京都市民も市立美大出身者の多くが、創造芸術・新匠・二紀などの展覧会に出品して、官展（帝展）の系統を引く日展に入選する者が少ないのを不満に思った。彼らは日展での入選受賞を、美術界への登竜門と考えているので、市当局や市議連に日展に入選する人材を育てるよう訴えるようになる。が、いごっそう長崎太郎は、市長や市当局者に自分の意見をはばからず申し述べ、議論では勝つが、次第に彼らの感情を損ねるようになる。

一九五六（昭和三一）年五月三十一日、長崎太郎は教授会の学長選挙で三選された。が、ここに「三選はまかりならぬ」という高山義三市長と教授会との間に、深刻な対立を生じることとなる。市側と大学との対立は、大学の自治という重い問題を含んでいたため、この事件は全国的に大きく報道されることとなる。

高山義三は一八九二（明治二五）年六月十五日の生まれ。旧制第五高等学校から京都帝国大学法科大学を卒業している。五高時代には、キリスト教に関心を示し、京大では「労学会」という社会問題研究グループに所属した。長崎太郎とは、生年は同年同月ながら、高山は二年遅れての大学入学であった。卒業後法科大学の助手をしながら、友愛会の支部長などを経験している。一九一九（大正八）年徴兵志願し、軍隊生活を体験する。一九二一（大正一〇）年、弁護士を開業。川崎・三菱両造船所の労働争議の主任弁護士、第二次大本教事件、小笛事件で名をあげた。第二次世界大戦後の一九五〇（昭和二五）年二月の選挙で、日本社会党の公認を受け、京都市長に当選した。高山は好き嫌いの強い、強烈なリーダーシップの持ち主で、ワンマンを極めた性格であった。再選には保守系で出て当選、三選には自民党の推薦を受けた。市長辞任後は国立京都国際会館の初代館長となった。

長崎太郎のいごっそうぶりが、その人生で最も強烈に発揮されたのが、高山義三とわたりあった「京都美大事件」であったといえよう。市長の高山義三は、もともと前市長神戸正雄や助役の田畑磐門の招きで来た長崎太郎の京都美大初代学長就任を、快く思っていなかった。一方、長崎太郎は、選挙の度に党派を変える節操のなさや常に権力をちらつかせる高山の態度に、学長就任時から煮え湯を飲まされるような思いをさせられてきたこともあって、徹底的に闘う姿勢を見せた。長崎太郎の美大学長三選をめぐっての事件が深刻化したのは、このような背景があったからである。

双方ともに硬骨漢である。が、根本の原因は、大学自治に対する設置者の無理解が起こした事件であり、のちの同じ公立大学である高崎経済大学や都留文科大学で生じた学園紛争と同質のものが、そ

こにあった。市立大学の発展期に伴い、大学との間に設置者がまま起こすトラブルの一典型である。京都美大が美専時代から学校紛争に見舞われたのは、時の権力者に頼る悪習があったからだとして、長崎太郎は大学の自治確立を目指す。設置者であるという名目のもと、外部の権力が大学自治に介入するとは何事かと、このいごっそうは立腹する。彼はそこに大学の自治の危機を直観したのである。

長崎太郎は〈京大柳沢事件〉と〈瀧川事件〉を体験していただけに、大学自治への市長の介入が許せなかったのである。事件のくわしい経過は、長崎太郎自身が『佐々木惣一先生と私』に書き残した。当時の各種新聞、教授会声明、市長宛て教授会各種文書、市長意見書、学生有志声明、父兄会・同窓生有志の意見書までを用いて、ねばり強く事件の大筋を浮かび上がらせている。大学自治とは何かを考えさせる文章である。他方、高山義三には『わが八十年の回顧』（若人の勇気をたたえる会、一九七一・六）という、自分史めいた立派な造本の回想録があるが、京都美大事件には、どういうわけか一言もふれていない。大学自治に干渉したことは、間違いであったと気づいたからであろうか。

京都市立美術大学の大学自治をめぐる事件に関する文献として、大石義雄「大学自治侵犯の典型的事例―基本的人権は果して保障されたか―」（『ジュリスト』一九五七・五）がある。大石義雄の肩書きは、「京都大学教授・法博」となっている。ここで大石は教育公務員特例法違反の責任は、京都市当局にあり、「大学の学長選考の内規は当大学自身これを解釈するところにこそ大学自治の本質が存在する」との見解を述べている。大石義雄の論文の「二　京都市立美術大学長三選の拒否」の箇所から引用しよう。

事件は、長崎太郎氏が京都市立美術大学の学長当時のことである。長崎学長の任期が間近になったので、京都市立美術大学では、昭和三十一年五月に同大学の学長選考内規により次期学長候補者の選挙を行ったところ、長崎氏が圧倒的多数を以て当選した。そこで、同美術大学は、この選挙の結果に基いて学長任命方を京都市長高山義三に申請した。ところが、同市長は、三選は違法だという理由で任命の申請受理を拒否した。長崎氏の三選は違法だというのは、京都市立美術大学の学長選考内規に違反して学長選挙がおこなわれたからということなのである。

それでは同美術大学の学長選考内規はどういう定めになっているかといえば、次の如くである。

同内規第八条は、学長の任期について「任用の日より四年間とする。但し、再選の場合は二年間とする」と定めている。ところで、高山市長は、この規定の意味は、三選は不可能だということであるとして、長崎氏の三選を拒否したのである。一方、美術大学側では、この内規の意味は三選を認めない趣旨ではないという理由で長崎氏の三選を強く主張しているのである。

なお美術大学では、学長選考内規実施に関する教授会申合事項として、その第八条に、「この内規の実施又は解釈につき疑義がある場合は教授会がこれを決定する」と定め、この申合せ事項はすでに市当局の承認するところであるというのである。この両者の対立状態は約半年つづいた。半年間も美術大学の教授諸氏の結束がつづいたのである。

一九五七（昭和三二）年二月九日の日付で、京都市長高山義三と京都美大学長代理須田国太郎の連名による共同声明が出された。市はこれで手を打とうとしたのである。が、それで大学自治の問題が解決したわけではなかった。大学自治の本質は、当大学自身が解決すべきなのである。大石義雄は教育公務員特例法にも反する市の介入を問題にし、「京都市立美術大学の学長を選考する者は同美術大学自身であって、京都市当局ではない」と右の論文で言い切っている。

京都市立美術大学事件は、最終的に京大総長鳥養利三郎のアドバイスを双方が受け入れるということで収まった。大学の自治の尊重と「学長選考内規の明確化」が鳥養から出され、長崎太郎が身を引くことで、市と美大との九か月以上にわたった紛争に、ともかく決着を見たことになる。かくて長崎太郎は京都美大を去った。それにしても荒廃の極みにあった京都美専を再建し、大学に昇格させた長崎太郎の功績は大きい。

京都美大彫刻科の教授辻晋堂は、長崎太郎が美大を去るに際して、実物大の彼の胸像を作って贈った。像の背面には、次のような文字が書かれている。京都美大の大学自治をめぐる経過が一教授の目からとらえられ、簡潔にまとめられているので引いておく。

長崎太郎先生像

長崎太郎先生は京都市立美術大学初代学長也。在職七年その功績大にして学内の信任を得て三選さる。然りと雖も市長之を拒否して発令せず。蓋し先生の性剛直清廉いやしくも阿諛せず、権力に屈せざることを悪みおそれたるものゝ如し。これ実に典型的なる大学自治の侵害なり。教授会は之を世論に訴へて抗争すること九月、遂に学内の結束破るゝに至る。

世上理に就くの人尠く、利に奔る人は多し。凡そ自利を先とする輩能く自治を全うし得ざること論を俟たず。大学の教授中にこの徒あるは悲しむべし、只是糊塗の言恰も条理あるに似たりと雖も巧緻なるのみ。先生故山に隠棲せんとして離洛の日近し。惜別の情禁じ難し。こゝに素を以て真を写して之を贈り聊か積年の労苦を慰めんとするのみ。

昭和三十二年四月二十四日　　晋堂

像は現在ご遺族の長崎陽吉氏が保存されている。わたしは京都府木津川市加茂町の長崎陽吉氏宅で何度か見せていただいている。風格のある胸像だ。

京都市立美術大学を去った長崎太郎は、郷里の高知県安芸市に戻り、文字通りの晴耕雨読の生活をするようになる。地元の歌誌『高知アララギ』に短歌や随筆の寄稿、厖大な蔵書の整理、さらには父文之助から受け継いだ山林への植林と仕事はいくらもあった。

彼は第二次世界大戦中から京大教授久松真一の影響で禅に親しみ、『四部録』を開いたり、白隠の『心経著語』に向かったり、仏教に関心を示し、『臨済録』から『金剛経』、そして『碧巌録』にまで挑戦していた。仏典の収集も熱心であった。

京都美大学長を去った年（一九五六）の秋、長崎太郎は『現代と仏教』十一月号に、「行じて居るもの」という一文を寄せている。ここで彼は、青年期のキリスト教体験にはじまり、戦後の自身の宗

教遍歴を語る。終わりの方で彼は、「そんな次第で、今年六十四歳、一度人身を失えば萬劫にもかえらない私が、今心から求めるものは、私を導き助けて、私に行相の心なくして、無行を行ぜさせてくれるような善き師である」と書く。

郷里に帰った彼の心に、若き日のキリスト教体験が甦る。ここに安芸の宣教師森勝四郎がクローズ・アップされるのであった。彼はその事蹟を記した伝記をまとめようと思い立つ。安芸はこの伝道者の当初の本拠地のようなところがあった。戦時中弾圧にめげず信仰を貫いた弟子の野中一魯男も安芸郡の出身であり、森勝四郎と彼をめぐる資料は十分ではないものの、何とか収集できた。長崎太郎が『宣教者森勝四郎先生とその書簡』（一九六一・九）というユニークな書を自費出版しているのも、うなづけるところである。本書に関しては、すでに第Ⅰ章で触れている。

長崎太郎晩年の安芸時代にめぐりあった人物に田渕隆三という青年がいた。田渕は後年『光の朝 絵の恩師と私』（八王子グループ、一九九八・一）に、長崎太郎晩年の姿を書き留めることとなる。本書は「室戸と高知の中間に安芸という小さな町がある。町の外れに岩崎弥太郎の生家があるくらいでこれといった特徴もないが、町は黒潮を受けて、雨足の見える南国の雨に打たれて、味わい深い風情がある。この安芸で絵の恩師・長崎太郎先生との出会いがあった」にはじまる。

当時東京芸術大学の四年生であった著者は、夏休みに安芸の東陽館という旅館で、晩年の長崎太郎と会うことになる。以後五年間、田渕は「何回も何回も、親元に帰るようにお伺いし、指導していただいた。三回にわたって銀座で開いた個展も見にきていただいた」という。七十歳を越した高齢の長崎は、若き田渕隆三との交流を楽しんでいたかのようである。田渕は本書に長崎太郎から貰った書や便りを写真版で復刻している。書は格調高く、便りの内容は経験に即したものが多く、説得力に富む。例を引いておく。

模写を誠実に、君自身がそれをかくつもりで続けて下さい。そうだ君の先覚が古画に生きて居るのだ。それは決して古画ではなく、君のためには、生きた先生それ自体なのだ。基本から教えられて、君の絵が出来る。君はいつになっても弟子を持つ必要はないが、生涯立派な師を持たねばならぬ。君のよき師は、博物館で君の来るのを待って居るのだ。（中略）

あせってはならぬ。目的を高い山の上に見定めて置けば後は足許（もと）を見て一歩一歩踏みしめて行けばよい。山の頂上を度々見上げて居ると、疲れるばかりだ。

男子が正しい心で一度決心した事はつとめて怠らねば必ず成就する。私は自分の経験から之を君に申し上げる。

繰り返して云う。君の筆の先に、全身全力を投じて、他をかえりみないように。

現代の若人への忠告としても通じる文章だ。「男子が正しい心で一度決心した事はつとめて怠らねば必ず成就する。私は自分の経験から之を君に申し上げる」とは、一見、大時代的なせりふに聞こえるものの、時代を超えた真実が宿る。太郎は若い田渕隆三に向かって、悩む時には、「土佐の青い海を見に来いよ」と言ったという。

一九六九（昭和四四）年十二月七日、長崎太郎は脳梗塞で、高槻

市の大阪医科大学付属病院で死亡した。享年七十七歳であった。前月の十一月九日、姪の結婚式のため上京し、世田谷区用賀町の息子映吉の家に泊まった際、ペンを持つ手が震えると訴えたが、それが病の前兆であった。容体は一か月近くで悪化し、ついに帰らぬ人となる。葬儀は十二月九日、京都市左京区南禅寺福地町の臨済宗真乗院で行われ、高知県安芸市の先祖代々の墓に葬られた。戒名は「真徳院教道太定居士」である。

長崎太郎の生涯は、自由と独立の精神に立脚していた。それは父文之助の教育の賜物であり、また、一高時代のすぐれた仲間――芥川龍之介・恒藤恭・土屋文明・藤岡蔵六・菊池寛・矢内原忠雄・三谷隆信らとの交わり、さらには京大時代にめぐり合った終生の師、佐々木惣一の指導によるところが大きかった。持ち前の潔癖さ、信じたことに殉じるいごっそうぶり、文学や美術の高い鑑賞眼、通訳を必要としない英語力、優れた教育手腕、学校再生力……、そうした才能・技量を彼はフルに発揮して第二次大戦後の日々を送った。苦労はあったものの、京都市立美術大学学長の頃の長崎太郎は、人生で一番輝いた得意の時代であった。それは一高時代からの親友恒藤恭の晩年にも通うものがあった。

前述のように、恒藤恭も戦後大阪市立大学初代学長として、困難の中で廃校寸前の大学を立ち直らせ、全国屈指の公立大学に発展させている。また、彼は憲法擁護を旗印にしたジャーナリストとして、新時代のリーダーの役割を演じた。恒藤恭の生涯と大阪市立大学学長時代のことは、小著『恒藤恭とその時代』（日本エディタースクール出版部、二〇〇二・五）を参照されたい。

ニューヨーク時代、長崎太郎はダウンタウンの古書店が火災にあった直後の売り出しで、リンカーンのゲティスバーグ宣言が初めて印刷になった本（富豪のエマトン蔵書の一本）を手に入れている。言うまでもなくゲティスバーグ宣言は、リンカーンが格調高い調子で、アメリカの理想を説いたものである。彼はその精神を、帰国後の教育という仕事の中で生かし切ったと言えようか。

現在京都市西京区大枝沓掛一三一六の新天地に学舎を移転した京都市立芸術大学の付属図書館には、すでに記したように長崎太郎の旧蔵図書が「長崎文庫」として収蔵されている。『長崎文庫目録』もまとめられていて参考になる。彼はウイリアム・ブレイクの収集家であると同時に、古書の収集にも、一家言をもっていたのである。

気骨ある教育家として、常に理想を高く掲げ、誠実に一生を送ったこのオールド・リベラリストの生涯をたどって感じることは、ここにもまた同時代人共通の〈闘いの生涯〉が存在したということである。その不屈な高貴な精神の歩みには、芥川龍之介と同時代を過ごした青年時代の夢が、豊かに託されていたといってよいだろう。

（完）